

錦織監督

映画の現場から



●○●18

今年も残すところあとわずか。2011年は忘れられない年になった。

3月11日の地震発生直後、私は都内で自家用車の中だった。激しい揺れは車体自体を大きく揺さぶった。ガラス張りのビルがしなるように揺れ、高架の首都高速道路のコンクリートがガタガタンとぶつかる音が聞こえた。大きな国道はビルから一斉に飛び出してきた人でいっぱいになった。余震が続く道路に座り込む人たち。世界で一番の人口密集地、便利はずの大都市がその時「停止」した。

すぐに予定を変更して帰路に就いた私は見たこともない景色を見た。地上に人があふれ、陽が沈むと、歩いて帰る人で歩道がいっぱいになった。コンビニのトイレはごも大行列。棚から食料や飲み物が消えた。電車は全て止まり、道路という道路の車が立ち往生。震源地から離れた関東でさえこのありさまだった。

以前、大山王国の皆さんのほからいで、大山のブナ林を歩いた際、大山が

究極の「ローカル」は「グローバル」になる

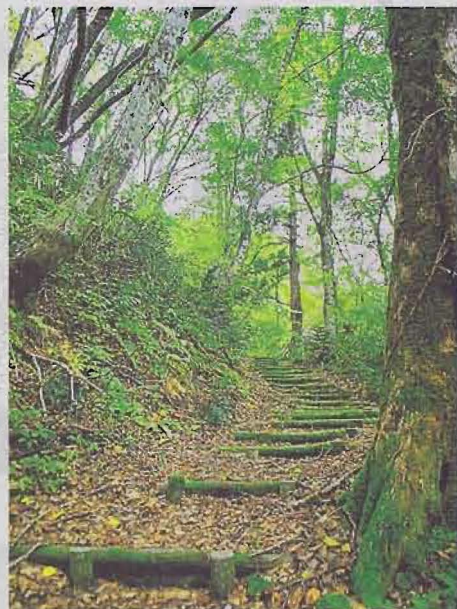
世界に誇れる田舎の環境

霊山だから、全国的に建築に不向きなブナの木が伐採されても、このブナだけは信仰から残ったという話を聞いた。大山に世界でも有数の自然林と環境が残されているのは信仰や伝承、人々の自然への畏敬の念のおかげだ。近年、ブナが水を浄化したり、蓄える役目をしていることがわかってきたというから、建築に不向きだといっただけで伐採した目先の考えも浅はかといえよう。

日本の自然や地域のコミュニティ、奇麗な水など田舎に残る環境は世界的に比較して誇れるもの。昔は家でみそやしょうゆを造り、炭も焼いていた。現代では無添加の食べ物が高級食品だが、便利さに流されず地域の文化にこだわりを持って生き、食し、生活していく基本の先に発展がないといけないのでは、とあらためて思う。わがふる里にはその環境がまだ残っている。ただ経済的な豊かさだけを求めていると道に迷うのではないか、そこに大義や誇りがないと地域がなくなってしまうのでは。

今年隠岐を舞台にした映画「渾身(こんしん)」(仮題)を撮り、ますますその気持ちは強くなった。地域活性化、村おこしなどという言葉が空虚に思えるほど、熱い人たちがいた。日本が、日本人がなくなってしまったモノが隠岐の島にある。心が震えた。現在映画制作は、編集を終え、これから音楽をつけたり、足音や風の音などの効果音を張り付ける作業だ。良い感じの仕上がりになっているので、ご期待いただきたい。

大きな価値観の転換のとき…全国に、世界に届けなければならぬ映画。来年はこの映画で日本のみならず、世界の人たちに感動を届けたいと思っている。皆さん良いお年を！



ブナの原生林に続く登山道(大山)

(錦織良成・映画監督)

— 第2、4金曜掲載 —